



やす じ かん
休み時間に
あそ とも だ ち
遊ぶ友達

ジェイソンは、ほかの子供たちのようにサッカーをするのが好きではありませんでした。



ゲイル・キニー・コルネリウス
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

ジェイソンは毎日、休み時間になると、木のかげにすわって本を読んでいた。ほかのほとんどの子供たちはサッカーをしていました。ジェイソンは前にその子供たちとサッカーをしたことがありましたが、あまり楽しくありませんでした。早く走ったりボールをけったりするのは、あまり得意ではなかったのです。たくさんの子供たちが周りで走ったり、さげび声を上げたりすると、あまり良い気持ちじゃありませんでした。

しかしジェイソンは、さびしい思いをしたり仲間外れになったりするのはいやでした。ほかの子供たちはとても楽しそうでした。自分も友達と一緒に楽しくすごしたいと思いました。

ある日、休み時間にジェイソンが本から目をはなして顔を上げると、キラが外のテーブルの前ですわって本を読んでいるのに気がつきました。それに、マークがかべに向かって石をけているのも見えました。この二人はなぜ、ほかのみんなと同じようにサッカーをしないのでしょうか。

次の日も、ジェイソンは観察しました。キラは、昨日と同じようにテーブルで本を読んでいますし、マークは地面にすわって草をいじっていました。ジェイソンは、また本を読み始めました。読みながら、ずっとキラとマークを見ていました。二人とも静かなことをするのが好きなのかもしれません。

その日の午後、ジェイソンはお母さんに言いました。「ぼくは毎日、休み時間に本を読んでいるんだけど、みんなはサッカーをしているんだ。」

「それでいいんじゃないの」とお母さんは言って、にっこりと笑いました。「わたしもあなたと同じくらいするとき、そうだったわよ。いつも本を読んでいたの。」

ジェイソンもにっこりと笑いました。ジェイソンは、お母さんと一緒に本を読むのが好きでした。

「サッカーが好きではないのはぼくだけだと思っていたんだ」とジェイソンは言います。「でも、サッカーをしない子がほかに

も二人いるんだ。」ジェイソンはお母さんに、キラとマークのことを話しました。

「その二人と友達になれるかもしれないわね」とお母さんが言いました。

ジェイソンはうなずきました。「そうだね。でも、どうすればいいのかわからないよ。」

「あなたもキラも本を読むのが好きだけど、読書は一人でするものね」とお母さんは言いました。「ほかに何か好きなことはないの?」

「オセロが好きだよ」とジェイソンは言います。「それに、学校にはオセロのボードがあるんだ。」

「ふーん」とお母さんが言いました。「そのオセロで何ができるかしら、休み時間に。」お母さんは考えこむふりをしました。

ジェイソンは笑いました。「いいことを思いついたよ。」

次の日、休み時間のベルが鳴ると、ジェイソンはオセロのセツ

トを持ち出しました。そして、キラが本を読んでいるテーブルに歩いて行き、キラが顔を上げると、ジェイソンはオセロを見せました。「トーナメントをしない?」

「いいわよ」と、キラは言いました。「でも、二人だけで?」

「ちょっと待って」とジェイソンは言いました。今日も草の上ですわっているマークのところまで走っていき、声をかけました。

「ねえ、マーク。オセロゲームやらない? トーナメントをしようよ。」

マークはにっこりと笑いました。「ぼくはお父さんと一緒にオセロをやってるよ。ぼく強いんだよ。」

「そうか、良かった!」ジェイソンもにっこりと笑いました。「さあ、始めよう。」●

このお話は、アメリカ合衆国での出来事です。

イラストレーション: ルー・ブリーツ